第三十六回武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

選者 金子千侍

特選

一席 狂言の終えて虫干す神楽殿　中野区 篠浜子
二席 元朝や鶏が真っ赤な声を上げ　飯能市 森泉双輪
三席 リュックより犬の顔出て梅三分　多摩市 橋本宏子
四席 少年の輝く瞳兜虫　多摩市 益田温子
五席 園児らの声重なりて山笑う　入間市 滝沢スエ子

秀逸（出句順）

破魔矢賣る巫女の眼元の付け睫毛　青梅市 津川弧羊
春耕の遥か人影日の出山　新座市 長谷川栄
一喝のあとは静かに今朝の雷　あきる野市 米山のり子
明月を待つ夕空の広さかな　大田区 竹内茂子
夏料理山の珍味に風添えて　あきる野市 平井孝征
一望に関東平野緑滴る　大田区 赤木日出子
大根干し耳をすませば風の神　新座市 百合京一
大欅瘤まで染る紅葉かな　国立市 中西清子
もう一波時雨れて御岳暮るるらし　羽村市 杉原功一郎
下るには膝がもの言ふ冬御坂　飯能市 多多華

佳作（出句順）

民話聞く御師の山並霧晴れて　八王子市 岡光子
風薫る青い目の武者通りけり　青梅市 新海博司
神域は若葉風のみ御嶽山　調布市 竹中文男
月見餅主が配り御師の宿　国分寺市 堀内ひろし
万緑の一歩一歩や御岳山　横浜市 尾崎弘子
万緑にレトロポストの映ゆる駅　豊島区 上田美恵子
神の山古く棲みゐる青大将　多摩市 萩生田芳孝
鮎の膳茶屋までとどく川の音　越谷市 神山俶江
御師の宿落葉寄せあり竹ぼうき　千代田区 小川真理子
洗はれしケーブル駅の年用意　青梅市 原島康典

応募総数　五五四句

選者吟

抱卵の鶏抱き直す春の雷

奉納俳句選評

一席　狂言の終えて虫干す神楽殿　篠浜子

〝虫干し〟は黴や虫害を防ぐために夏の時期に干すこと。同義語の〝土用干し〟は衣類の湿気をとる為の事。掲句の本意は湿気をとる目的だが、敢て狂言のあと神楽殿に舞衣裳を〝虫干し〟したと表現された作者の感性に心ひかれます。狂言と虫干し、この諧謔こそ、俳諧の醍醐味です。

二席　元朝や鶏が真っ赤な声を上げ　森泉双輪

〝真っ赤な声〟が本句の総てであります。赤には、昂揚、発揚、上げ潮、歓喜などなど、総てプラス指向です。年明けの早朝何よりも早く、鶏が、それわそれわ真っ赤赤の大声で元朝の到来を告げたのでした。正に天命を受けた鶏の絶叫ともいえる〝大旦〟告知でありました。

三席　リュックより犬の顔出て梅三分　橋本宏子

梅三分の早春が本句の舞台です。リュックに背負われた犬が、顔だけ出して辺りをキョロキョロ嬉しそうに見回しております。背負っている人は、背中に犬の暖かさが伝わって気持ちよいのでせう。人と犬との弥次さん喜多さん、微笑ましい滑稽な動画を見ているようです。

四席　少年の輝く瞳兜虫　益田温子

掲句は一気に十七語の直截な表現で詠まれております。一見単調に見えますが、眼目は少年の〝輝く瞳〟にあります。立派な角、艶々と輝やく甲、大兜虫を見詰めている少年垂涎の瞳。正に最短詩形の真髄を突いた作品です。

五席　園児らの声重なりて山笑う　滝沢スエ子

園児達の集団がやってきました。大声の会話、笑い声、みんな重なってそれわ瑞瑞しく、萌黄色のように楽しさ一杯です。回りの山々も大欠伸をしながら目覚めて、笑いだしてしまいました。メルヘェンのようなショートポエムです。

第三十七回 奉納俳句募集要項

一、作品は未発表に限る
一、受付けは指定用紙にて投句箱へとする
（郵送等直接の受付は致しません）
一、締切りは平成二十二年一月十五日
一、発表は平成二十二年三月中旬

御嶽神社あれこれ

海を越え、帰った!? 櫛眞智命の神徳

「今も昔も神社を参拝し、老若男女、信仰に関係なく一喜一憂し楽しめるものって何でしょう?」新春を迎え新たな志を胸に神様へ誓いを立てる。ふと目を向けると、笑顔や神妙な顔つきの者が白い紙切れを手にしている。その脇では目を閉じて四角い木箱を振る者が列をなしています。もうお分かりですね。答えは「おみくじ」です。くじの語源は「串」や「奇し」が「くじ」に転化したなど色々な説があります。御祭神の櫛眞智命が知恵と占いの神とされる由縁もここにあります。神話に於いては櫛眞智命は岩戸に隠れた天照大神を招き出すために卜占をしたとあり、世界中にある櫛の歯の数だけの物事を占うことが出来るとされています。当社では秘祭として「太占祭※」が伝わりますが、「御籤」も古来よりの型を残し伝わっています。この御籤はおみくじの源流に近く、符号をつけた木片を引いていただき占う方法※で、それに応じ吉凶が版木で刷られた籤紙をお渡しします。さて、最近ですが「武蔵國號御社」と書かれた籤箱が奉納されました。その昔となりますが、この箱を古美術商から譲られた方は、美術品の一つとして海外に持ち出されました。そして人手を渡り一人の日本人の方の元へたどり着き、その方の帰国と共に日本へ帰り、他の方へと渡ります。最後に箱を手にされた方は「武蔵國號御社」と書かれた題字をみて、当神社に縁があるのではと、御奉納下さりました。なんと此の箱は現在神社で使われている籤箱とよく似ており、調べて頂きましたところ安永7年～慶応4年頃に作られた箱であろうことが判りました。安永といいますと今から230年くらい前になります。現在刷られている籤紙は江戸頃の版木を元に明治頃に刷り直されたものですが、中の木片にかかれた符号も現在伝わっている御籤と全て一致しました。櫛眞智命の神徳を現した箱は数百年の長い旅を終えて御嶽山へ帰ってきたのです。文頭では「楽しめる」と記しましたが、この御籤はご存じのおみくじとは違い恋愛・合格などと占意が細かくは分かれておりませんし、大凶などはそれは恐ろしい事が書いてあり、大凶がでてもそれを「楽しめる」という感じはありません。なぜでしょう?信仰心がずっと深かった時代、神様から授かる籤は生活での一つの指針だった事と思います。本来は神託である籤に自分を正して向き合い、自身を見直す事が出来てこそ、初めて籤が進むべき道の指針となったのでしょう。ただの行事として神社を参拝する方が多くなり、感謝とは?と疑問に思う社会になりつつあります。ですが、おみくじに一喜一憂される皆様の姿を見ると日本人の心の中にはまだまだ人智を越えた何かへの思いが脈打っているのだと感じます。おみくじのような何かのきっかけがございましたら、今の自分の心を照らし合わせ、そして向き合い大切にしてください。そして御来山の折りには心を鎮めて神前に拝礼してから「おみくじ」を引いてみて下さい。

※「太占祭」日本最古の占いとされ、鹿骨を斎火で焙り、農作物の出来を占う。秘事とされ非公開。
※この方法は日本書紀にも「短籍（細長く切った薄い木や紙の小片）を取りて、謀反けむ事をうらなった」とあり、飛鳥時代に遡ります

（権禰宜　片柳）